

7. 取組に関する講演会・シンポジウム

本学の現代 GP の取り組みを進めていく上で、特に有効と思われる健康づくりに関する課題について、地域住民、本学の学生・教職員が共に学ぶ機会として、平成 18 年度および平成 19 年度に神戸市看護大学現代 GP 講演会を開催した。また、取り組みの最終年度（20 年度）には、本取り組みの成果報告も兼ねて、地域住民をはじめ、各方面から意見を聞く機会として地域住民、本学学生・教員、行政関係者による神戸市看護大学現代 GP シンポジウムを開催した。各講演会、シンポジウムの概要とその評価について以下に述べる。

1) 平成 18 年度神戸市看護大学現代 GP 講演会

(1) 平成 18 年度現代 GP 講演会の概要

平成 19 年 3 月 17 日（土）（14 時から 16 時）に、本学が所在する神戸研究学園都市大学共同利用施設「UNITY」において、NHK の黒川敬氏を招き、「地域の健康づくり街づくり、共に語ろう、考えよう！—NHK『難問解決ご近所の底力』制作担当者の黒川さんを迎えて—」をテーマに、平成 18 年度神戸市看護大学現代 GP 講演会を開催した。

参加者は 78 名で、その内訳は、地域住民 34 名（学園東町 15 名、学園西町 9 名、その他 10 名）、神戸市西区職員 2 名、本学関係者（学生・教職員）40 名、熊本大学の教員 4 名であった。講演の内容は、まず、NHK の番組「難問解決ご近所の底力」で過去に取り組んだ事例である「孤独死を防げ」「振り込め詐欺からお年寄りを守れ」「抜け道暴走車を撃退」のビデオを視聴し、その後、各事例に関するクイズ形式の質問を、講師と参加者が共に考えるというものであった。各取り組み事例とその事例に関するクイズ形式の質問を以下の表Ⅱ-7-1 に示しておく。

表Ⅱ-7-1 「難問解決ご近所の底力」の事例とその事例に関するクイズ形式の質問

【クイズ第 1 問】

◆孤独死を防げ～千葉県八千代市米本団地～

高齢者の孤独死が相次いでいた団地が番組に登場。引きこもりがちなお年寄りとしでもつながりをもとうと、保育園の子ども達が絵手紙を出す作戦を始めました。配達には、郵便局の協力を仰ぐことにしましたが、法律の壁があって動けないことがわかりました。その時、皆さんだったらどうしますか？

【クイズ第 2 問】

◆振り込め詐欺からお年寄りを守れ～東京都渋谷区本町～

振り込め詐欺からお年寄りを守るために立ち上がった渋谷本町。ところが、半年経て尋ねてみると、活動がうまく行っていないという。その原因はなんだったのでしょうか？その問題を解決するには、皆さんだったらどうしますか？

【クイズ第 3 問】

◆抜け道暴走車を撃退～東京都小金井市～

静かな住宅街に、1 日千台もの車が押し寄せる。侵入禁止の時間を無視した違法なドライバー達。住民はその撃退に立ち上がった。ところが、次々と問題にぶちあたる。さて、皆さんならどうしますか？

(2) 平成 18 年度講演会の参加者へのアンケート結果

平成 18 年度神戸市看護大学現代 GP 講演会の参加者を対象に行ったアンケートの結果を以下の表 II-7-2 に示した。

表 II-7-2 参加者へのアンケート結果（平成 18 年度現代 GP 講演会）

| |
|---|
| <p>1. 性別：男 13 名、女 30 名</p> <p>2. 年齢：30 代 6 名、40 代 5 名、50 代 9 名、60 代 16 名、70 代 7 名</p> <p>3. 住まい：学園東町 15 名、学園西町 9 名、その他 19 名（西区 8 名、垂水区 2 名、須磨区 1 名、兵庫区 1 名、熊本 3 名、無回答 4 名）</p> <p>4. 講演会はどこで知ったか？</p> <p>①回覧板 4 名、②ポスター 2 名、③チラシ 8 名、④友人知人 3 名、⑤その他 24 名（看護大 8 名、西区民センター講演会 8 名、ウェブサイト 2 名、推進員 1 名、前回参加 1 名、ボランティア連絡会 1 名）</p> <p>5. 講演会に誰と来たか？</p> <p>①家族 8 名、②知人・友人 17 名、③その他 18 名</p> <p>6. 講演会の評価</p> <p>①「良い」31 名、②「まあ良い」7 名、③「ふつう」1 名、④「やや悪い」2 名、⑤「悪い」0 名、⑥無回答 2 名</p> <p>7. 講演会評価の主な具体的内容</p> <p>①「良い・まあ良い」の内容</p> <ul style="list-style-type: none">◆良い内容の話だった。◆引きつけるような講演だった。◆楽しく話を聞かせてもらった（VTR・クイズあり）。（2）◆現実にあった話なのでわかりやすかった。（2）◆話し方が上手だった。（2）◆真面目で一所懸命な講演だった。◆クイズ形式で参加して一緒に考える講演だった。（4）◆単なる苦労話ではない。◆知らないことがよくわかった。◆ビデオ付きでわかりやすかった。（2）◆地域で問題（身近な問題）を解決した事例の話で良かった。（7）◆たくさんの角度から話を聞いた。◆物事を進める基本や動きがわかった。◆力を入れすぎない、問題に当たると考える、そして次ぎに進む、ことが大切。◆身近な問題をどうしたら解決できるか？皆で考えることが大事だと教わった。◆問題解決のヒントを得た。（2）◆まちづくりに参考になった。◆常識的であったが参考になった。◆近所づきあいの大切さがよくわかった。（2）◆スライドは良かった。◆番組の舞台裏がわかった。◆切実で他人事ではない問題に、何から始めるべきか考えながら聞いていた。◆せめて NHK は、視聴率だけで番組の評価を決めないで、いい番組を続けてほしい。 <p>②「やや悪い」の内容</p> <ul style="list-style-type: none">◆クイズ形式で時間が長かった。（2）◆NHK の広告だった。 |
|---|

(3) 平成 18 年度現代 GP 講演会の成果

上述のアンケート結果や当日の様子から、今回の講演会は参加者にとって楽しく、魅力的であったと思う。また、地域の身近な問題への関心を高める機会になったといえる。講師の話はユーモアがあり、ビデオを見ながらクイズの答えを参加者全員で楽しく考え、様々な意見を出し合うことができた。

当日は、本学の現代 GP の取り組みである「西区ヘルスアップ作戦」のヘルスアップ推進員として、地域の健康づくりにかかわっている人も多数参加し、ヘルスアップ作戦を展開していく上でも大いに参考になったようである。また、講演会に参加した本学学生も積極的に発言し、住民自身の力で困難な問題も解決することができるということを具体的に学ぶことができた。今回の講演会は、地域住民、本学の学生・教職員が、住民主体のまちづくりを共に学び、共に考える絶好の機会となった。

2) 平成 19 年度神戸市看護大学現代 GP 講演会

(1) 平成 19 年度現代 GP 講演会の概要

平成 20 年 2 月 17 日(日)(14時から 16時)に、神戸研究学園都市大学共同利用施設「UNITY」において、「笑い与健康『笑う門には福来る』」をテーマに、医師の松本治朗氏と落語家の笑福亭學光氏を招き、平成 19 年度神戸市看護大学現代 GP 講演会を開催した。

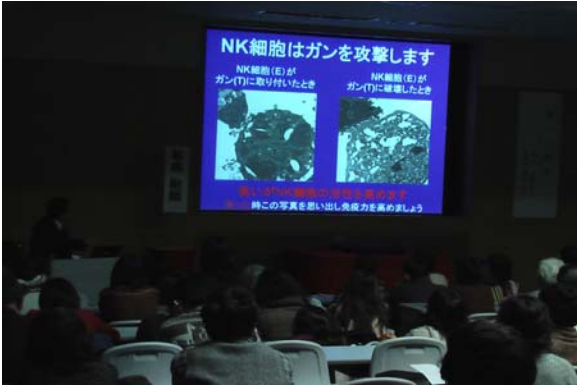
当日は雪の舞う中、参加者は予定より少なめの 169 名であった。講演の概要について以下に述べる。

① 「笑い与健康」(医師：松本治朗氏)

松本氏は、笑い学会の理事をされており、自らも「笑い」について研究されている。講演では医師の立場から、様々な写真を比較しながら、どれだけ笑顔が人を引き付けるか、また笑顔でどれだけ人の印象が変わるかを説明された。さらに、大脳のどの部分が笑いを命令し体に良い変化をもたらすかを、自身の研究成果を交えて説明された。最後に、笑い学会のモットー「一日一回大笑い」を推奨され、「一笑一若」「一怒一老」という教訓と共に「笑うと若返りの効果がある」と付け加えられた。「笑うと自分も楽しいけど、人も楽しい。さらに健康によろしい」と締めくくられた。松本氏の巧みでユーモアのある話術に参加者は引き込まれ、会場から大きな笑い声とともに、うなずいたりメモを取ったりと「笑い」に対する深い関心がうかがわれた。

② 「落語」(落語家：笑福亭學光氏)

お囃子(すずめの学校)と共に登場した學光氏を、参加者は手拍子で迎えた。「関西人のここがおもしろい！」という身近な話から、「落語の基本とは」など、様々な話題で巧みな芸を披露された。さらには腹話術で弟子の「笑福亭小學光」を登場させ、会場は大いに沸いた。参加者は 9 歳から 80 歳以上と幅広い年齢層であったが、學光氏のやさしい人柄と次々に繰り広げられる芸に、会場はただただ大笑いの渦であった。終了後、参加者は皆、笑顔で晴れ晴れとしており、「楽しかった」「ありがとう」と沢山の暖かい声が聞かれた。



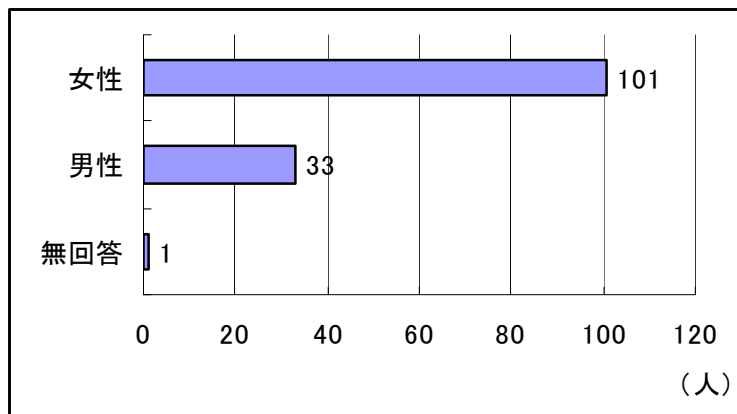
松本氏による講演



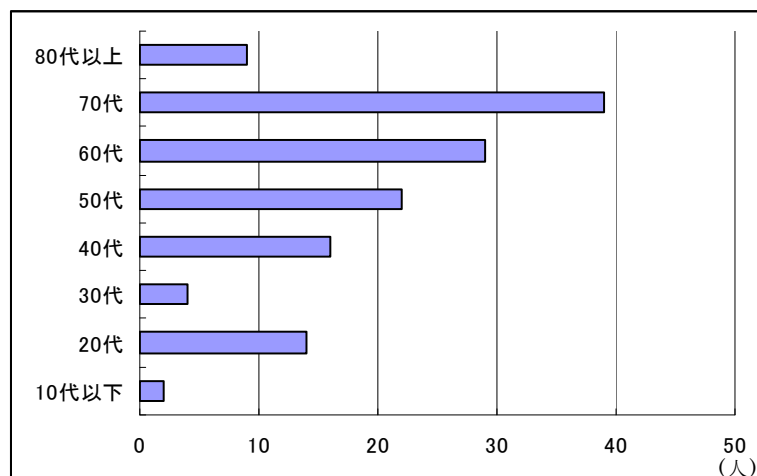
學光氏による腹話術

(2) 平成 19 年度現代 GP 講演会の参加者へのアンケート結果

平成 19 年度神戸市看護大学現代 GP 講演会の参加者を対象に行ったアンケートの結果を以下の図Ⅱ-7-1～図Ⅱ-7-4、表Ⅱ-7-3 および表Ⅱ-7-4 に示した。なお、参加者 169 名のうち、アンケートの回答者は 135 名であった。



図Ⅱ-7-1 参加者の性別（平成 19 年度現代 GP 講演会）



図Ⅱ-7-2 参加者の年代（年齢）（平成 19 年度現代 GP 講演会）

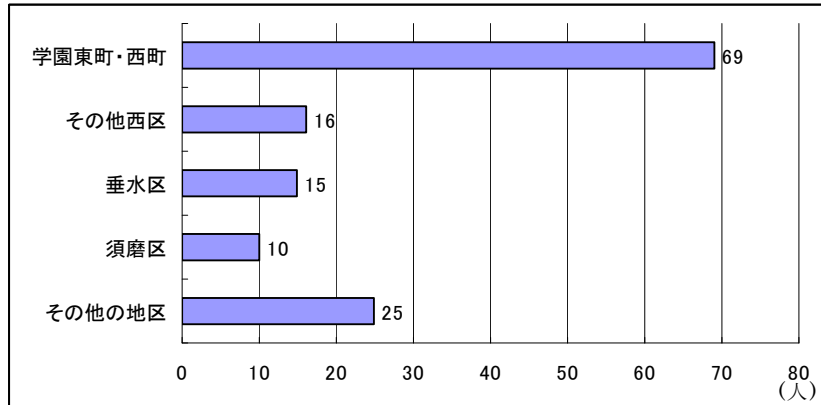


図 II-7-3 参加者の居住地域（平成 19 年度現代 GP 講演会）

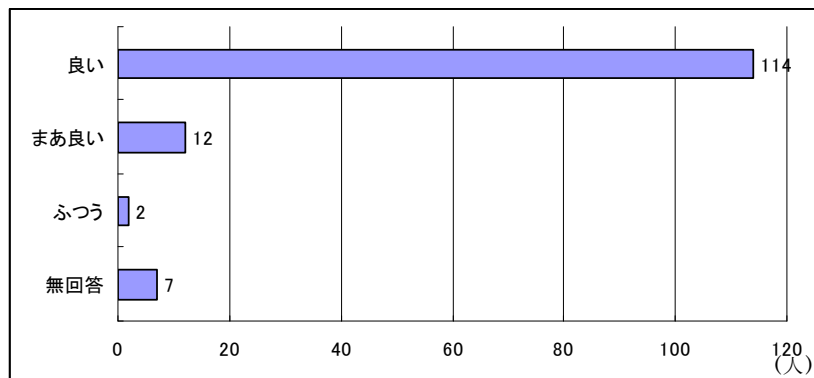


図 II-7-4 講演会の評価（平成 19 年度現代 GP 講演会）

表 II-7-3 講演会評価の主な具体的内容（平成 19 年度現代 GP 講演会）

- ◆テーマが良かった。
- ◆テーマが珍しく、深刻でなく良かった。
- ◆笑いが健康に良いと理解でき、笑いの効能・大切さがわかった。
- ◆心が温かくなった。
- ◆楽しく講演・落語を聞いた。
- ◆楽しく笑いについて勉強できた
- ◆構成が良かった。わかりやすく、具体的で面白かった
- ◆会場の広さ、時間配分、内容がとてもよかった。
- ◆暮らしに役立った。
- ◆日常でできる身近な健康法を楽しく聞くことができた。
- ◆よく笑った。笑いを実感した。
- ◆本物の笑いを知った。
- ◆講師の選択がよかった。
- ◆医師と落語家という違う分野でも共通点がありよかった。

表Ⅱ-7-4 今後、講演会で取り上げてほしいテーマなど

| | | |
|------------------------------|---------------------|--------------|
| ◆音楽セラピー | ◆市看ならではの健康観の披露 | ◆癒しと健康 |
| ◆心の癒しと健康効果 | ◆初期の癌の過ごし方 | ◆老いの準備・認知症対策 |
| ◆介護保険料徴収の実態と使用の実態 | ◆病気別の講演会 | ◆食に関すること |
| ◆老人の精神衛生と地域への関わり方 | ◆1人暮らしになった時の心がまえなど | |
| ◆民間療法を含め効能 | ◆家族の大切さをテーマにしたもの | ◆食育について |
| ◆川柳、俳句、短歌などについて | ◆笑いについて（同じテーマで第2弾を） | |
| ◆モラル、マナーが落ちた日本人をいかにレベルアップするか | ◆旅行のお話 | |
| ◆作家、芸能人などの講演を聞きたい | ◆スポーツと健康 | ◆子育てについて |

(3) 平成 19 年度現代 GP 講演会の成果

今回は医師と落語家の 2 名の講師を招き、まず‘笑い’の科学的理論を理解し、次に、落語を聞いて実際に笑うという 2 部構成で行なった。参加者は、講演テーマと内容がわかりやすく、講演の目的がはっきりしていたため聞きやすいようであった。実施後のアンケートには、笑いがもたらす効用を実感したという意見が多く聞かれた。また、本学教職員からも「お腹が痛くなるまで笑った」「もっとこのような企画をやりましょう」との声があった。

今回の講演会により、最近注目されている‘笑い’について参加者と一緒に考え、また自分自身で‘笑うことの大切さ’を実感することができ、参加者の健康に対する意識の向上に繋がったと思われる。また、講演会の広報活動について、今回は、本学現代 GP の取り組みの対象地域において、本学に関わる実習病院や西区役所をはじめ様々な施設への広報を行い、さらに、本学、ユニティ（開催場所）、西区役所の 3 箇所のホームページに講演会の案内を掲載したため、広範囲から多くの参加者があった。

今後も、暮らしのエッセンスになるような、理論と実践という体験型の健康支援につながる講演を行っていきたいと考える。

3) 平成 20 年度神戸市看護大学現代 GP シンポジウム

(1) 平成 20 年度現代 GP シンポジウムの概要

地域や家族を基盤とした人々の健康生活を支援する看護実践能力の育成と、住民主体の健康づくり、まちづくりを、地域住民や行政などと共に図っていくとする取り組み「地元住民と共に学び共に創る健康生活」を、平成18年度より本学学生・教職員が一丸となっ
て行なってきた。平成20年度は本取り組みの最終年度にあたり、その成果報告も兼ね、各方面から意見を聞く機会として、平成20年11月29日（土）（13時～17時）に神戸研究学園都市大学共同利用施設「UNITY」において、地域住民、本学学生・教員、行政関係者による神戸市看護大学現代GPシンポジウム（基調講演・成果報告・シンポジウム）を開催した。当日は、神戸市西区の住民、他大学の教員や学生、行政関係者、本学学生・教職員など66名の参加があった。

当日は本学の池川清子学長の挨拶のあと、まず大学と地域の連携に関する基調講演があり、その後、本学現代GPの取り組みに関する成果報告およびシンポジウムが行われた。

以下に、その概要を述べる。当日のプログラムはp168の資料Ⅱ-7-1に示した。

①基調講演

文部科学省高等教育局医学教育課看護教育専門官の小山田恭子氏より「大学と地域の連携による健康支援」と題した基調講演があった。「大学全入時代」における大学の重要な役割としての地域貢献、在宅医療へシフトしつつある医療提供体制における地域保健システムの連携強化などの社会の重要課題にふれ、それらをふまえた大学における看護教育の課題について、図表等も交えてわかりやすく述べられた。基調講演の発表抄録はp169の資料Ⅱ-7-2に示した。

②成果報告

本学が3年間にわたり実施してきた現代GPの各種取り組みの成果報告を、本学現代GP委員会学内調整責任者の高田早苗教授が行った。先述したように、本学現代GPの取り組みは多岐にわたり、多くの部門が様々な活動を行っているが、今回の成果報告では、そのうちの主要な取り組みの概要と成果について、パワーポイントを用いて多くの写真や図表などを交えてわかりやすく簡潔に報告がなされた。成果報告の発表抄録はp170の資料Ⅱ-7-3に示した。

③シンポジウム

シンポジウムは、「住民による教育支援と学生による地域支援の融合—どのような看護実践能力が身についたのか—」をテーマに、本学の高田昌代教授のコーディネートで進められた。シンポジストは、地域住民の立場から教育ボランティアの中塩健彦氏、学生の立場から本学3年生の室若葉さんと吉岡萌さん、教員の立場から本学基盤看護学領域看護技術学分野の森下晶代講師、そして地域行政の立場から神戸市西区保健福祉部長の福田豊治氏であった。



シンポジウムの様子

中塩氏は、本学の開学時から、このような取り組みを期待していたと切り出し、教育ボランティアとしての経験もふまえて、「患者役の際に学生の流涙に出会い、戸惑い、心打たれたこと」「自身の入院の経験をふまえた看護師への思い」、そして「本学への期待」などについて重みのある言葉で語った（中塩氏の発表抄録は p171 の資料Ⅱ-7-4 参照）。

中塩氏は、本学の開学時から、このような取り組みを期待していたと切り出し、教育ボランティアとしての経験もふまえて、「患者役の際に学生の流涙に出会い、戸惑い、心打たれたこと」「自身の入院の経験をふまえた看護師への思い」、そして「本学への期待」などについて重みのある言葉で語った（中塩氏の発表抄録は p171 の資料Ⅱ-7-4 参照）。

本学学生の室さんと吉岡さんは、今回の取り組みを通して地域住民と直接ふれあいながら、机上では得られない学びを積み重ねた経験について、学生の立場で素直に述べた（室さんと吉岡さんの発表抄録は p172 の資料Ⅱ-7-5 参照）。

本学教員の森下講師は、教育ボランティア（地域住民）が患者役として大学教育に関わ

ることにより、「単に看護技術の実践能力が向上するだけではなく、学生への応援や見守りが学習に好影響を与えていること」、「教育ボランティア自身の健康意識の高まりに繋がっていること」などについて、アンケート結果もふまえて明瞭に述べた（森下講師の発表抄録は p173 の後掲資料Ⅱ-7-6 参照）。

福田氏は神戸市西区と本学が協働で行っている事業について概説し、行政の立場から、その成果と課題について述べた。また、大学と地域住民の橋渡しの役割を行政（西区）が行なうことの重要性についても言及した（福田氏の発表抄録は p174 の資料Ⅱ-7-7 参照）。

終盤には、指定発言者として、神戸市保健福祉局病院経営管理部長の 大下勝氏、新見公立短期大学の 古城幸子教授から、本学現代 GP の取り組みに関する講評を受けた。大下氏は、本学の設置者である神戸市の立場から、本学の役割と今後の期待について述べ、本取り組みを継承・発展させるために本学が計画している「健康支援地域連携センター」構想についても言及した。また古城教授は本学の現代 GP の外部評価委員でもあり、本学の取り組みに関する成果と課題について、第三者評価の結果もふまえて的確に講評され、今後の発展への期待を述べられた。

閉会あいさつとして、本学の現代 GP の事業推進責任者である 稲垣絹代教授が、この 3 年間の取り組みの総括と関係者への感謝を述べ、新たに計画している「神戸市看護大学健康支援地域連携センター」において、今回の取り組みを継続・発展させていく決意を表明し、盛会のうちに閉会となった。

平成20年度神戸市看護大学 GP シンポジウム 地域住民と共に学び共に創る健康生活

▼プログラム▼

13:00 開会あいさつ 池川清子（神戸市看護大学 学長）

13:10 基調講演「大学と地域の連携による健康支援」

小山田恭子（文部科学省高等教育局医学教育課 看護教育専門官）

13:40 神戸市看護大学現代GP成果報告「地域住民と共に学び共に創る健康生活」

高田早苗（神戸市看護大学 教授）

14:30 シンポジウム「住民による教育支援と学生による地域支援の融合

—どのような看護実践能力が身についたのか—

1. 地域住民の立場から 中塩健彦（神戸市看護大学 教育ボランティア）

2. 学生の立場から 室 若葉, 吉岡 萌（神戸市看護大学 学生）

3. 教員の立場から 森下晶代（神戸市看護大学 専任講師）

4. 地域行政の立場から 福田豊治（神戸市西区 保健福祉部長）

◇コーディネーター 高田昌代（神戸市看護大学 教授）

<指定発言> ・同様の取り組みを行っている他大学の立場から

古城幸子（新見公立短期大学 看護学科長(教授)）

・行政の立場から

大下 勝（神戸市保健福祉局 病院経営管理部長）

17:00 閉会あいさつ 稲垣絹代（神戸市看護大学 教授）

◇総合司会 岩本里織（神戸市看護大学 専任講師）

「大学と地域の連携による健康支援」

小山田恭子（文部科学省高等教育局医学教育課 看護教育専門官）

平成 20 年度の学校基本調査によれば、高校卒業者の大学・短大進学率は 55.3%と過去最高を更新した。大学数も 765 校と 10 年前より 160 校近く増加している。

進学率が上昇する一方で、18 歳人口は減少を続けており、大学・短大への入学者数は 68 万 4 千人と前年度より 1 万 4 千人減少した。

進学希望者全員が大学に入れる「大学全入時代」を迎える中で、大学は、従来の学問追及の場としてだけではなく、社会人など多様な学生のニーズに応える生涯学習の場としてその機能を発揮することが期待されている。

さらに、平成 18 年に改正された教育基本法において、研究成果を広く社会に還元し、社会の発展に寄与していくことが、大学の使命として明記されたが、定員割れを起こす大学が増える中、地域に愛され、地域に貢献していくことは多くの大学の重要課題となっている。

このように、大学を取り巻く環境は変化しており、大学の持つ豊かな資源をいかに社会に還元するかが、大学の大きな課題の一つとなっている。

一方、医療に目を転じると、医療者主体から患者中心の医療へと基本的な理念が変化し、さらに病院中心から在宅医療へシフトしつつある医療提供体制の動きなどを背景に、地域住民をエンパワメントし、地域の保健システムの連携を強化していくことが大きな課題となっている。そして、大学には、こうした課題に積極的に関与していくことが期待されていると考える。

「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」は、現代的な政策課題に対応する、大学のすぐれた取り組みを財政的に支援することを通じて、大学が教育を活性化させ、人材養成機能を強化することを期待して予算化されたプログラムである。神戸市看護大学が現代GPの支援を受けて実施している取り組みは、学生が住民主体の健康づくりに参加することを通じて、学生の看護実践能力育成を図り、地域の保健システムの充実につなげていくことを目的としているとうかがっている。自治体や看護協会など、多様な機関と協働し、さらに、インターネットを活用するなどの幅広い事業展開を通じて、どのような成果が生まれたのか、本日の成果報告は大変興味深い。

現代GPの支援期間は限定されているが、今シンポジウムのような取り組みを通じて、成果が広く共有され、効果的な取り組みが他の地域にも広がっていくことを期待している。また、今回の事業が今後も継続され、地域の活性化と大学教育の質向上に引き続き貢献していくことを強く願っている。

神戸市看護大学 現代 GP 「地域住民と共に学び共に創る健康生活」

神戸市看護大学 高田 早苗

平成 18 年度からスタートした本学の取り組みも今年度で一応の完成年度を迎えます。この取り組み全体を振り返り、その成果を確認し今後の課題を明らかにしたいと考えます。

1. 本取り組みの目的と概要

本取り組みは、平成 18 年度学部新カリキュラムで構築した「健康生活支援学」で目指す、学生の地域や家族を基盤とした人々の健康生活を支援する看護実践能力の育成と、住民主体の健康づくり、まちづくりを行政、住民とともに図ることを目的としています。

取り組みの具体的な内容としては、①本学看護教育に住民参加協力を得て、看護教育を創っていく、②県看護協会との提携による「まちの保健室」や西区との協同による「ヘルスアップ作戦」、小中高等学校等との連携による「命の出前講座」や「ピアカウンセリング」等の次世代育成プログラムの展開と学生の参加、③これらの取り組みを補完する e ヘルスシステムの構築などです。

2. 取り組みの実際

①の学生教育では、18 年度に小児健康生活支援論等へのゲストスピーカー、基礎看護学技術演習等への模擬患者、健康教育の受講者役として、住民の参加協力を得ました。19 年度にはさらに拡大し、全 9 科目で住民の参加が得られています。さらに、健康生活支援学実習Ⅰがスタートし、ボランティア家庭を訪問することによって、一人暮らしの高齢者がいろいろな工夫をしながら元気に生活している様子や子育て世代の母親の悩みなどに直接触れる機会が得られました。また、地域の催しに参加したり、民生委員や養護教諭などを含めたさまざまな立場の方から話を聞くことによって、それぞれの地域の特性や人々の関わり合いなどを体験的に理解することができました。

②の地域連携・貢献では、「まちの保健室」「ヘルスアップ作戦」「次世代育成プログラム」など、当初予定の各事業を進めてきました。「まちの保健室」は、〈骨の話〉や〈あなたにもできる心肺蘇生法と AED〉などのテーマでミニ講座や体験学習、健康相談などを実施してきました。また、途中から「子育て支援」や「こころと身体の看護相談」がそれぞれ独立して実施するようになり、より充実してきました。「次世代育成プログラム」のピアカウンセリングは 19 年から神戸市の事業として位置づけられ、同年度の活動は年間 40 回前後を数えるほど要請も多く活発になっています。

3. 成果（と今後の課題）

3 年目を迎えるなかで、学内で住民の方々を見かける光景も日常的となりました、本学が地域の人々に親しみやすい存在として認識されるようになった、これにより学部教育への住民参加協力依頼がスムーズに進められたと考えています。また、事業に参加することを通して地域の人々の間につながりがでてきたことも大きな成果と言えます。例えば、「まちの保健室」に参加した住民が学生の教育ボランティアを積極的に引き受ける、近隣の住民を誘ってくるといった波及効果がみられています。「子育て支援」では、参加した母親たちがその場での交流をきっかけに、互いに相談し支えあう仲間となってきました。さらに、学部教育への協力も含め、事業に参加した住民の方々から、自分の健康を考える機会となった、役立ち感が得られている、大学が利用しやすくなったなど、現代 GP で目指してきた「共に学び共に創る健康生活」の基礎が形作られてきたと評価しています。この取り組みの継続と学生のボランティア参加による学びを育成することが課題です。

看護大学のGPプログラムなどに一住民として参加して

中 塩 健 彦

1. 簡単な紹介と地域の状況

太山寺の地域（伊川谷町前開上）は農村地帯であり、学園東や学園西の都市型の生活様式とは、多少違っている。

2. 看護大学GPプログラムとの接点

最近社会的な傾向として健康への関心は非常に高い。前開地区でも同様に、老人会の集まりで看護大学の稲垣先生から「老人の健康について」と言うお話を聞いた。その時に「まちの保健室」のことを紹介して頂いた。近くに看護大学が出来た時からずっと、そのような活動を期待していたので、すぐに参加することにした。また、大学が企画された運動継続プログラムにも参加し、健康相談、体力測定などをして頂いた。そして教育ボランティアの事を知り、参加するようになった。

3. 教育ボランティアの参加理由

教育ボランティアへ参加した理由は、①まず地域住民の健康のために活動して頂いている大学へのお礼の気持ちからであり、②次に私個人の度々の入院体験で、看護婦（当時）さんの役割が、医療現場でどんなに大きいかを身に沁みて感じているからである。看護大学の看護教育に協力することで、学生さんたちに、私が出会った素晴らしい看護婦さんのような看護師として、現場に立ってもらいたいと思ったからである。今まで多くの病院を見てきたが、病院の雰囲気は主に看護師が作り出していると言っても良いと思う。

4. これらのプログラムに参加して得たもの

- a) 今までただ単に「そこに看護大学という大学がある」という感じから「自分たちの地域の大学」という親近感のある大学に変わって来た。
- b) 「まちの保健室」など、看護大学の実践に参加して、自分の健康について関心がより高まった。また実際にそこで体の異常を発見してもらった例がある。
- c) また教育ボランティアとして学生さんたちの研究発表や看護実習などに参加し、色々と教えられることがあった。また学生さんたちも、一般住民が参加することで、より緊張感を持って取り組んでいたと思う。最初は自分たちが本当に役立っているのか多少不安もあったが、今は住民にも、学生にも共にプラス面が多かったのではないかと考えている。

5. 今後の希望

看護大学には、今後も今まで以上に地域住民の健康に関わりのある、そして学生さんたちの将来の実践に繋がるような教育活動をして頂きたい。大学と住民が、お互いの連携を密にして協力すれば、住民は健康面で、また学生は学習面で、共に大きな利点があると思う。

6. 終わりに

今までの取り組みへの感謝と今後への期待、行政への希望

「住民による教育支援と学生による地域支援の融合

—どのような看護援助能力が身についたのか—

神戸市看護大学 3年 室 若葉 ・ 吉岡 萌

私たちが1回生のときから関わってきたボランティア・授業・実習において地域住民の方々との交流を通して、私たちが学んだこと、自分自身が成長したことなどを発表する。ボランティアや授業・実習の実際とそこからの詳しい学びはシンポジウム内で述べる。

1. ヘルスアップ作戦でのボランティア活動
2. まちの保健室でのボランティア活動
3. 授業（小児健康生活支援学実習Ⅰ、看護技術演習）
4. 健康生活支援学実習での地域住民との関わり（神出地区、学園都市地区）
5. 健康教育（地域看護学演習）
6. まとめ

私たちは地域の方々と触れ合う中で様々な学びを得ることができたが、それらを大きく「地域住民の持つ力に関わるもの」「自分自身の成長に関わるもの」「看護実践能力の向上に関わるもの」の3つのカテゴリーに分けて、以下にあげる。

☆地域住民の持つ力

- ・住民自身の力が地域を変容させる大きな力となっている
- ・行政や専門家が一方的に主導するのではなく、住民だけが積極的に活動しているのではなく、お互いに協力することでより良い影響を与え合うことができる。また、相手から様々なことを学び、共に成長できる

☆自分自身の成長

- ・人々の優しさ、暖かさに触れ、人と関わる楽しさを知った
- ・体力測定や健康教育に参加することで、既存の知識の復習になる
- ・自分自身の技術の未熟さに気づき、自己の課題を見出すことができる
- ・患者さんへわかりやすく説明することの難しさや、世代の異なる人との会話の難しさ、言葉遣いの大切さ、社会常識の不足などから自分たちに欠けていたことを見つけることができた
- ・対象者への理解を深め、その人にあった個別性ある援助を行うことの大切さを実感した
- ・看護の専門家としての意識の高まり、責任感の芽生え

☆看護実践能力の向上

- ・主にコミュニケーション技術の向上につながる（具体的には、人との話し方や接し方、わかりやすい説明の仕方、対象者の生活にあった援助の提供の仕方など）
- ・家庭訪問などから対象者の日常生活を知り、健康につながる支援を考える援助技術の向上につながった

健康を支援する活動をするグループへの専門職としての働きかけについて学んだ

—地域住民による模擬患者導入の効果—看護技術演習の取り組み—

神戸市看護大学 基盤看護学領域
森下 晶代

看護技術演習の科目で行われる学生の技術練習は、臨床現場の場面を設定し、看護師、患者の役割を務めながら進行する。これまでの看護技術演習では、学生や教員が患者役を務めてきた。現代GPの取り組みの一環としての看護技術演習では、一部の時間帯で地域住民の方々にご協力いただき、患者役を務めていただいた。地域住民による模擬患者導入のねらいは、看護援助の基本としての相互性を身につけるということ、すなわち、想定場面に臨場感をもたせ、援助者としての姿勢を学ぶことである。期間は2006年12月～2008年11月で、看護技術演習の内容は、血圧・脈拍・体温等の測定、寝衣(ねまき)の交換、コミュニケーション技術等で、通算22単元、ご協力いただいた地域住民の数は延べ174名にのぼる。

初年度は、ご協力いただける地域住民の人数にも限りがあったため、これまで通り教員が患者役を務めるクラスと、地域住民が患者役を務めるクラスに分かれた。その2つのクラスの学生にアンケート調査を行った結果、地域住民が患者役を務めるクラスで、設定場面のリアリティが高かったことが明らかになった。また、地域住民が患者役を務めたクラスで特徴的だった(教員が患者役を務めたクラスでは確認できなかった)学生の学びは、「臨機応変な対応」「人としての礼儀」「積極性への動機づけ」「平常心を保つことの大切さ」等であった。さらに、ご協力いただいた地域住民の意見・コメントを聴取した結果、大きく分けて「援助の際の気遣いや留意点」「勉強になった、もっと知りたい」「もっと学生の力になりたい」「学生への応援・見守り」等の意見が確認された(下表参照)。

| 地域住民が患者役を務めたクラスの学生の学び | | 地域住民の意見・コメント | |
|-----------------------|---|-----------------------|---|
| 臨機応変な対応 | 練習したとおりに(技術を)行うだけでなく、患者さんの訴えに臨機応変に対応し、患者さんの欲求を満たしてゆくことが重要だと分かった。 | 援助の際の気遣い・留意点 | <ul style="list-style-type: none"> ・安楽というものは人によって違う。個々が感じる安楽がどういうものか、一人ひとりのことを考えてほしい。 ・患者の気兼ね・負担感が軽くなるようなコミュニケーション・・・それも技のうちです。 |
| 人としての礼儀 | はじめにきちんと挨拶をするということは人としての礼儀であり、人と人とのコミュニケーションにおいてもとても重要であると分かった。 | 勉強になった、もっと知りたい | <ul style="list-style-type: none"> ・患者役を演じる際には病気の知識が必要で、少し難易度が高かったが、こちらの勉強になった。 ・肺炎という病気についてよく知らなかったが、事例等の説明で、少し理解できた。 |
| 積極性への動機づけ | 校内で地域の方を患者役として講義に参加してもらえるなんて思っていませんでした。率先して看護師役をやらうと考えました。 | もっと学生の力になりたい | <ul style="list-style-type: none"> ・患者体験を持つ身として、もっといろいろなことを学生に話してあげたかった。 ・大学内に入ることができて嬉しい。今後も学生教育の力になりたい。 |
| 平常心を保つことの大切さ | 緊張してしまうと当たり前のことができなくなってしまう。平常心を保てるようにしておかなければせっかくの技術も知識も意味がなくなってしまう。平常心を保てたとしても技術がなければ、またそれも意味がないことだということ、つまり両者がそろわなければ患者にケアを行うことができないと感じた。 | 学生への応援・見守り | <ul style="list-style-type: none"> ・回を重ねるごとに学生の成長が見える。今後は楽しみです。 ・看護師になるということは大変なこと。頑張ってもらいたい。 ・いつか自分が入院した時には、新人看護師さんに温かく接してあげたい。 |

以上のことから、当初ねらいとしていた、「想定場面に臨場感をもたせ、援助者としての姿勢を学ぶこと」は、おおむね達成できたといえる。また、この取り組みでは、真剣に学び、練習を重ねることに対する学生の動機づけや責任感を培う、地域住民自身の学習等に役立つ等、当初のねらいをはるかに超える大きな成果も得ることができたといえる。地域住民による模擬患者は、看護技術演習において効果的な教育方法になり得ることが確認できた。

この場をお借りして、ご協力いただいた地域住民の方々に深く御礼を申し上げます。

シンポジウム 「地域行政の立場から」

神戸市西区保健福祉部
福田豊治

1. 西区中期計画によるまちづくり
 - (1) 3つの目標、9つの実践プラン、40の重点事業
 - (2) 看護大学との連携協力協定

2. 看護大学との協働事業
 - (1) 地域ヘルスアップ作戦
 - (2) プレパパ&プレママセミナー
 - (3) 命の感動体験
 - (4) 教育ボランティア

3. 協働のメリット
 - (1) 評価・分析力の向上
 - (2) マンパワーの充実
 - (3) 人材の育成

4. 今後の課題

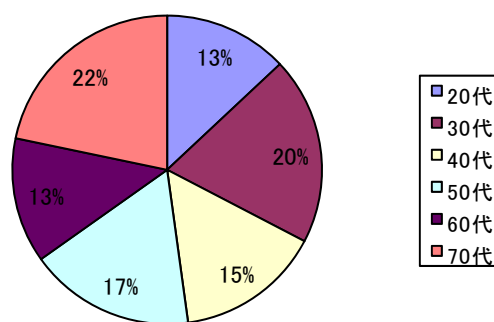
事業の充実とマンパワーの確保

(2)平成 20 年度現代 GP シンポジウムの参加者へのアンケート結果

平成 20 年度神戸市看護大学現代 GP シンポジウムの参加者を対象にアンケートを行った。その結果について、以下の表Ⅱ-7-5 および図Ⅱ-7-5 に「参加者の年代」、図Ⅱ-7-6 に「参加者の居住地」、図Ⅱ-7-7 に「参加者の立場」、図Ⅱ-7-8 に「参加者が興味をもった本学の現代 GP の取組」、図Ⅱ-7-9 に「今回の現代 GP シンポジウムへの興味」、表Ⅱ-7-6～表Ⅱ-7-8 に「今回の現代 GP シンポジウムに興味をもった理由・意見など」、表Ⅱ-7-9 に「その他の意見・要望など」、をそれぞれ示した。なお、参加者 66 名のうち、アンケートの回答者は 46 名であった。

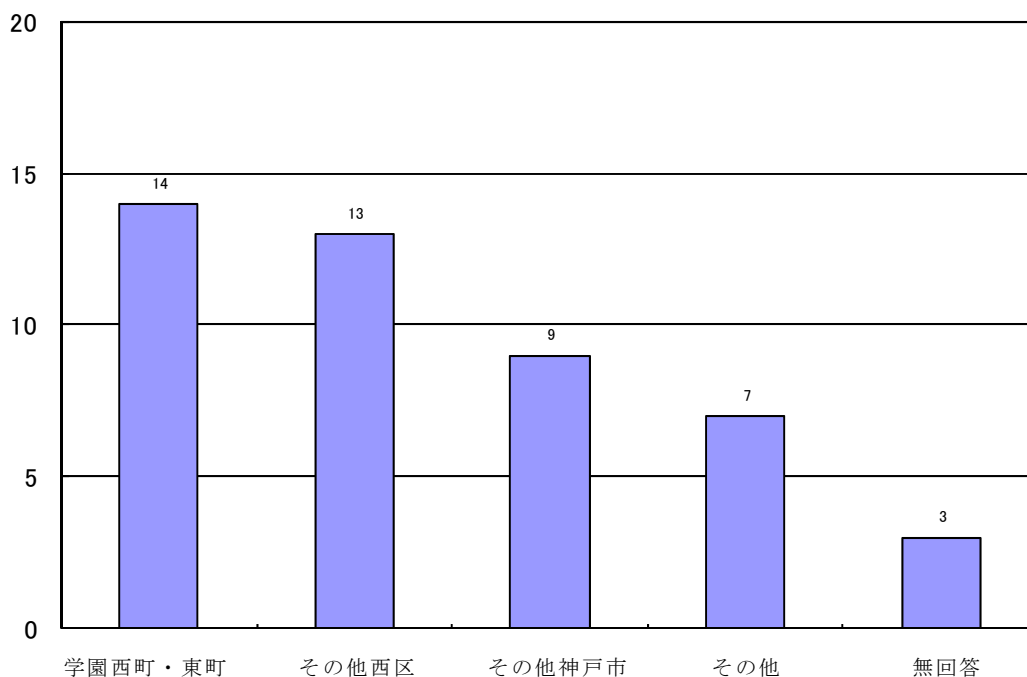
表Ⅱ-7-5 参加者の年代（平成 20 年度シンポジウム）

| 年代 | 人数 | % |
|------|----|--------|
| 20 代 | 6 | 13.0% |
| 30 代 | 9 | 19.6% |
| 40 代 | 7 | 15.2% |
| 50 代 | 8 | 17.4% |
| 60 代 | 6 | 13.0% |
| 70 代 | 10 | 21.7% |
| 合計 | 46 | 100.0% |



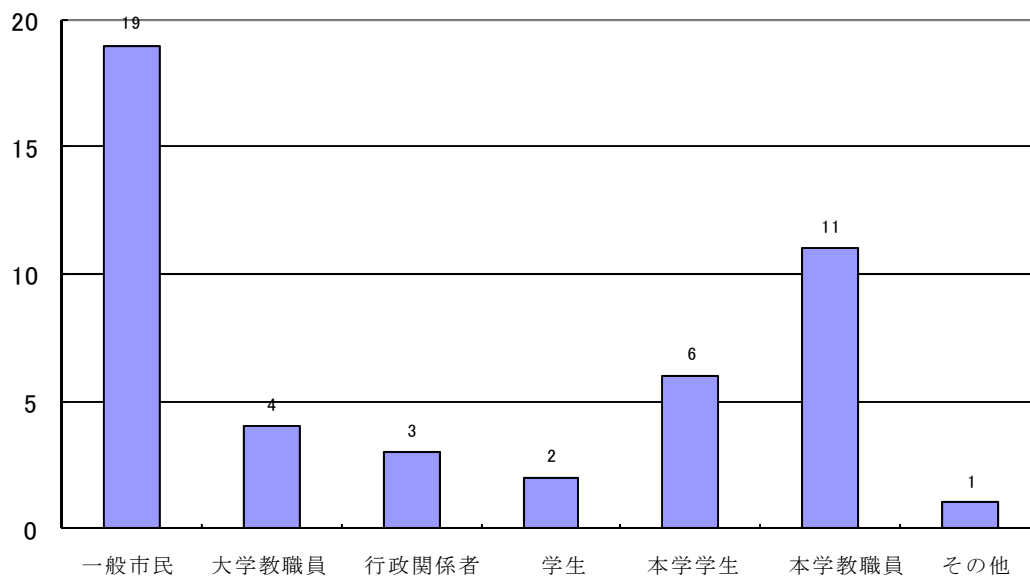
図Ⅱ-7-5 参加者の年代

(人)

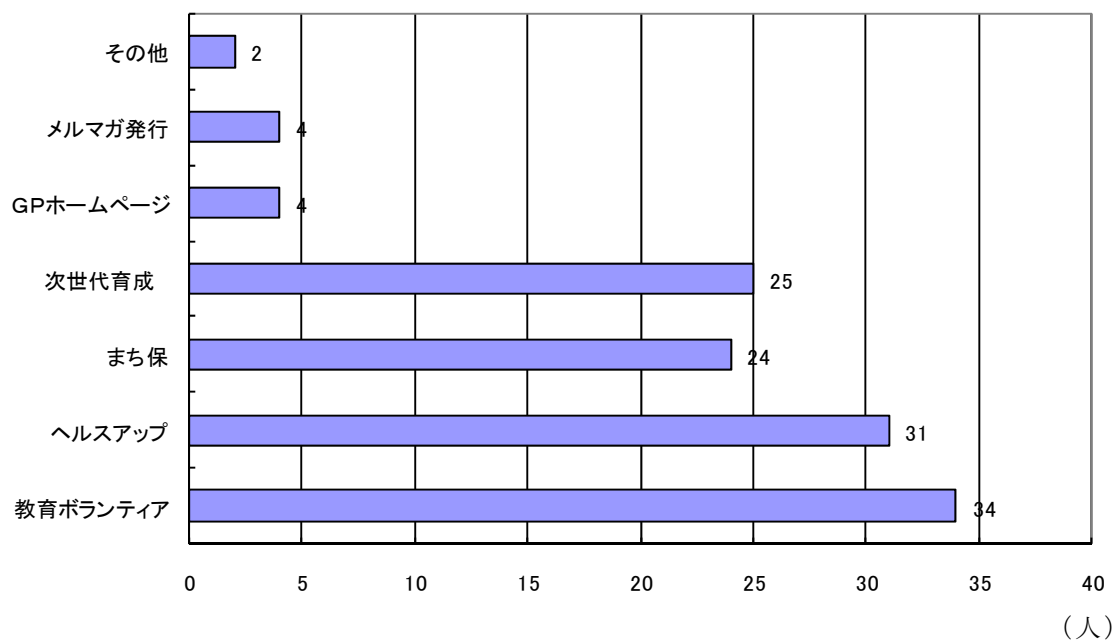


図Ⅱ-7-6 参加者の居住地（平成 20 年度シンポジウム）

(人)



図Ⅱ-7-7 参加者の立場（平成20年度シンポジウム）



図Ⅱ-7-8 参加者が興味深いと感じた取り組み（平成20年度シンポジウム）

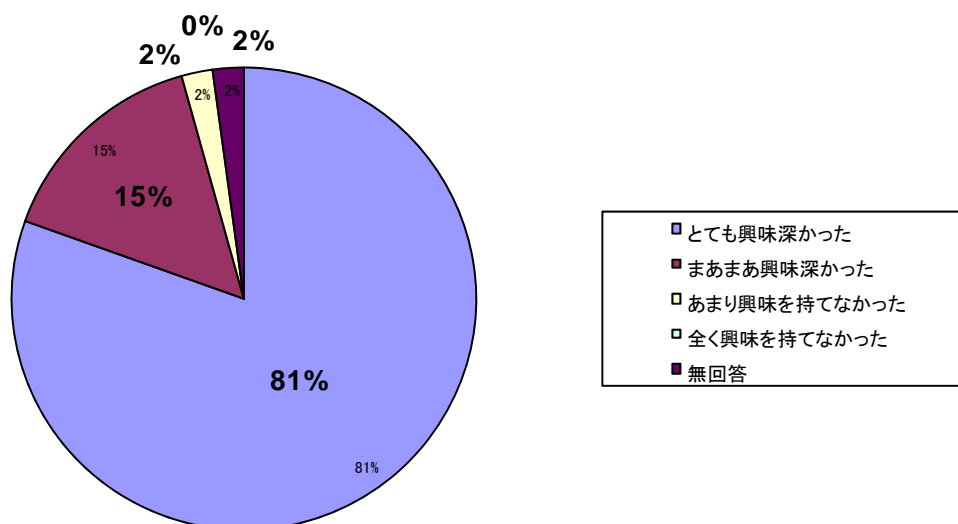


図 II-7-9 シンポジウムの興味深さの程度（平成 20 年度）

表 II-7-6 今回の現代 GP シンポジウムに興味をもった理由・意見など①（平成 20 年度）

【理由①：本学現代 GP の取り組み内容への理解が深まった】

- ◆GP の内容が判らなかったが、今回で全体的によく判った。
- ◆GP についてよくわかった。地域と大学の連携で健康支援していくことの大切さがよくわかった。
- ◆成果発表で、全体の目指すところと個々の具体的な取り組み関係が非常によくわかり、その意義を改めて感じた。
- ◆大学の取り組みがよくわかった。苦労も多いと思うが、今後も継続して行ってほしい。
- ◆健康教育の演習の際、教育ボランティアにきてもらい、よりリアルな演習を行うことができ、学生同士では、得ることのできない学びができたということや、理解してもらえたときの喜びなどを味わうことができたというメリットを感じていた。しかし、今日の講演で様々な立場からの成果発表で、教育ボランティア自身も知識を得ることができたことや、役に立っているという思いがもてたなど、互いの効果があるということが知れて興味深かった。また地域で学生を育てていこうという考えも興味深かった。
- ◆地元住民が、健康維持やボランティアに積極的であったことを知った。現代 GP の取り組みが与える住民・学生への学びが大きいことを実感した。
- ◆現在の看護教育でどのようなことが行われているのか知りたかったので、高田先生の話は興味深かった。
- ◆自分の今まで関わってきたことを振り返り、深く考える機会になった。また、取り組みに対する客観的評価や住民の反応が分かったことがうれしかった。

表Ⅱ-7-7 今回の現代 GP シンポジウムに興味をもった理由・意見など②（平成 20 年度）

【理由②：地域住民（教育ボランティア）の発表に関する意見】

- ◆シンポジウムではそれぞれの立場から話を聞いたが、特に地域住民の中塩さんの話、学生からの話は興味深くよいものだった。地域住民が学生のことを思い、温かく見守ってくれていることをとても嬉しく思った。学生にも是非聞いてもらいたかった。
- ◆シンポジストの中塩氏の話は、本当に心に響いた。ボランティアで患者役をしていただいているだけでも世話になっているのに、将来、学生が看護師になったときの職場環境のことまで考えてくれているとは驚きだった。頭が下がった。
- ◆地域住民の立場として中塩さんがいい話をしてくれたと思っている。
- ◆中塩さんをはじめ、住民の生の声をきけてよかった。地域住民に育ててもらっているのだと思った。恵まれた環境で学んでいることをとてもうれしく思った。その環境をかに活用して、これからも学んでいきたいと思えた。
- ◆住民や行政といった立場からの貴重な意見を聞くことができよかった。特に住民のあたたかい気持ちのこもった発表では、とても感動して涙が出た。
- ◆教育ボランティアによる学生への効果は感じていたが、実際にボランティアに参加している人にとってメリットを聞き、大学-地域住民相互に、より良いシステムであることを学んだ。
- ◆特に教育ボランティア、中塩さんの話に大変感動した。
- ◆GP の取り組みについての高田教授の話、中塩氏の話が特に良かった（話し方、話のスピード、声調）。自己体験談。この方の前職は何だったのだろうと非常に興味を持った。きっと素晴らしい仕事をされていたのだと思った。この方をシンポジストに選んだ大学の見識に感謝。
- ◆教育ボランティアがどのような気持ちでボランティアに参加していくのか、また、どのような効果が得られているのか、具体的に聞いたことがとても参考になった。地域住民の力を感じた。
- ◆住民の考えをこんなにじっくりと聞く機会はないので、本当に良かった。住民の、学生や教員のために協力したいという気持ちに感謝の気持ちでいっぱいになった。
- ◆教育の受け手の学生、教育ボランティアとして参加している人の話を聞くことができ効果が具体的に見えた。また、ボランティアを集めるヒントももらえてよかった。
- ◆住民がボランティアとして参加して、どのように感じているのかを知ることができたのは、自分が今後ボランティアに参加しようと思う気持ちをより高めてくれた。

表Ⅱ-7-8 今回の現代 GP シンポジウムに興味をもった理由・意見など③（平成 20 年度）

【理由③：本学学生・教員・シンポジウムに関する意見、今後の期待】

＜本学学生に関する意見＞

- ◆時々学生と接することがありますが、どの学生も相手の気持ちを考え、優しさが見受けられるので、将来が楽しみです。
- ◆看護師を目指している学生の看護師としての勉強ぶり（患者への心遣いなど）が少し聞けてとてもよかった。
- ◆学生が各部門で実践され、実習に行かれて大変活躍されていることを聞き、感動した。
- ◆「学生の立場から」の発表がよかった。多くの学生が彼女たちのような意識をもって社会人になれることを希望している。

＜本学教員に関する意見＞

- ◆大学教員の熱意を強く感じた。内容も素晴らしかった。

＜シンポジウムに関する意見＞

- ◆シンポジストだけの意見でなく、参加者からの発言もあって、会場一体で話し合いができたのが良かった。
- ◆教員、学生、地域住民、行政がそれぞれの立場から意見を言える貴重な場であった。
- ◆大学教員、学生、住民ボランティアの熱心な気持ちがうかがえてよかった。
- ◆「生活習慣、健康生活の改善」と「学生の学習面の緊張感、責任感」が興味深かった。
- ◆地域住民、学生、教員、行政の各立場から発表があり、それぞれの立場からの発表が参考になった。
- ◆シンポジスト、それぞれの立場からの話がきけて良かった。すべて感動した。参加できてよかった。出席者が少なく、こんないい話をもっと聞いて欲しいと感じた。
- ◆基調講演と 2 名の指定発言が良かった。

＜今後の取り組みへの期待・応援＞

- ◆健康支援地域連携センターの設立にむけて頑張ってもらいたい。
- ◆とてもパワーを感じた。ぜひ、引き続きこのパワーを発信してほしい。
- ◆住民、学生、教員が共に学び、成果が出た発表会を聞き、今後の活動に期待をもった。
- ◆様々な立場、観点からの地域への取り組みを聞き、大変勉強になった。看護大学という人に関わっていく専門家を教育する場が、地域という人の中に入り学ぶことは当たり前と思っていましたが、なかなかこれができないことも確かなことだと思った。すばらしい取り組みと成果に、これからも健康支援地域連携センター設立へ一歩も二歩も進めてほしい。
- ◆実習（演習）に地域のボランティアが来る、というのは考えてもみなかった案だが、とても勉強になるだろうと思った。まちの保健室や次世代育成事業は、住民にとっても役に立つことだし、行政等ではフォローしきれない面をサポートできて、学生にもやりがいがあるだろうと思った。（他大学の看護学生から）

表Ⅱ-7-9 その他の意見・要望など（平成20年度シンポジウム）

- ◆神戸市の大学なので、西区（地元）だけでなく、市内全域で看護職をまき込んだ取り組みができればと思った。看護大学がどういうところなのか少し理解できた。
- ◆GPの取り組みが今後も続くことを祈っている。
- ◆授業の枠をこえて、これからの取り組みが学生の主体性のもとに継続できるようなプランを考えていきたいと思う。
- ◆地域に根ざした健康支援地域連携センターの設立に期待している。
- ◆健康支援地域連携センター実現と発展を祈念している。
- ◆こんな素敵なシンポジウムに対して、あまりにも聴衆が少ないのが実に勿体なかった。大学の「継続の運動」に時々参加しているが、是非続けてほしい。今後も教育ボランティアとして役に立ちたいと思っている。
- ◆ヘルスアップ作戦も続けて行ってほしい。
- ◆今後も継続して地域住民と共に学び、共に創る健康生活のテーマを実施して行ってほしい。

(3)平成20年度現代GPシンポジウムの成果と課題

シンポジウムの参加者を対象にしたアンケート結果では、シンポジウムは「とても興味深かった」「まあまあ興味深かった」と回答した者があわせて95%であった。その理由・意見や感想から、今回、4名のシンポジストが具体的な取り組みに加え、その時に何を感じ考えていたかを発表したことが本取り組みの成果として理解され、これが興味につながったのではないかと考える。

また、シンポジウムに先だって、小山田氏の基調講演「大学と地域の連携による健康支援」があり、教育改革としての現代GPの位置づけが説明されたことや、その後、高田教授による本学現代GPの成果報告「地域住民と共に学び共に創る健康生活」で、本学の取り組みの全体像が示されたことにより、各取り組み間の関係や意義が確認できたことにより、理解や興味がいっそう深まったと考える。

今回のシンポジウムは、3年間にわたる本学現代GPの取り組みとその成果を明らかにしただけではなく、取り組みの継続・発展が、立場をこえて多くの人に期待されていることが明らかになった会でもあった。

今後、「神戸市看護大学健康支援地域連携センター」を早期に設立し、組織的な取り組みとして今回の取り組みを継続し、さらに発展させていくことが課題である。